

# 西アジア後期新石器時代の火葬形態

—テル・エル・ケルク遺跡の火葬墓を中心に—

廣永 尚子

Primary Cremation and Secondary Cremation at Late Neolithic Sites in West Asia: Cremation Burials at Tell el-Kerkh

Naoko HIRONAGA

シリア北東部に位置するテル・エル・ケルク遺跡の後期新石器時代層の墓地で検出された火葬墓を中心に、西アジア新石器時代の遺跡から発見された火葬墓を一次火葬と二次火葬に分類した結果、検出場所にバリエーションがあることが明らかになった。また、先土器新石器時代から後期新石器時代の遺跡で発見された焼人骨の出土状況に時期的変化が認められた。先土器新石器時代は儀礼的要素が強い二次火葬が行われていたことが推測できた。後期新石器時代に入ると、二次火葬の形態を継承しつつ、一次火葬が出現したことを考察した。その最も早い時期にテル・エル・ケルク遺跡の火葬墓は位置付けられた。

キーワード：火葬、焼人骨、埋葬、後期新石器時代

Cremation deposits and burnt human bones were discovered in the Late Neolithic cemetery at Tell el-Kerkh and in some Late Neolithic sites in West Asia. Cremations were classified as primary and secondary cremation types, and cremation deposits were classified as pit, urn, and deposit types. It is assumed that the pre-pottery Neolithic period followed only secondary cremation practices. Primary cremation might have emerged for the first time in the Late Neolithic period. Crematorium pits from the Late Neolithic Kerkh cemetery represent the oldest primary cremation discovered so far.

Key-words: cremation, burnt human bones, burial, Late Neolithic

## 1. はじめに

西アジアの新石器時代の遺跡からは、被熱痕のある焼人骨が稀に埋葬址や遺構の内外で発見されている。その証拠は散見的で僅かであることから火葬行為は稀有であり、焼人骨は時に偶然や事故による被熱と捉えられてきた。しかしながら近年、後期新石器時代<sup>1)</sup>のいくつかの遺跡で比較的まとまった火葬墓が発見され、火葬が行われていた証拠が増加している。また、シリア北部に位置するテル・エル・ケルク遺跡 (Tell el-Kerkh)<sup>2)</sup>において、およそ紀元前 6600~6100 年に位置づけられる墓地で火葬墓が複数検出されたため、火葬に関するまとまった資料が得られた。本稿では、西アジア先史時代において最も盛んに火葬行為が行われていたと考えられる後期新石器時代の火葬形態について、テル・エル・ケルク遺跡における火葬墓の分析を中心に検討し明らかにする。さらに、先土器新石器時代からの焼人骨の出土例を検討することで、西アジア新石器時代における火葬形態の変遷について考察を試みる。

## 2. 研究史

先史時代の火葬に関しては、1960年代頃から世界各地の遺跡から火葬例が報告されるようになった。さらに1980年代からは実験的研究が多く行われるようになり (e.g. Wells 1960; Bindford 1963; Thurman and Willmore 1981)、民族誌的研究成果を援用した解釈が試みられるようになった。現在ではポスト・プロセス学派や認知考古学に代表される社会的・儀礼的側面に焦点を当てた研究と、バイオアーケオロジーの分野において骨の変化を理解するための燃焼実験や火葬に用いられる温度や熱量、被熱人骨からの性別や外傷の同定等の研究が広く行われている。前者は、燃焼が人間の生物学的な肉体の著しい変化を短時間かつ客観的に引き起こすために、火葬とは変容そのものを表すと捉える解釈学的方法が現在広く用いられている (Oestigaard 1999)。トンプソン (T. Thompson) はこの解釈を支持しつつも、分析や解釈を行うためには検出された焼人骨や遺構のセットが本当の火葬であるかを判別する

ことや、世界各地の文化や場所により異なる火葬のバリエーションを分析することの重要性を指摘している (Thompson 2015: 8-9)。

西アジア先史時代において、明確な火葬墓が出現し始めるのは後期新石器時代であり、文化圏の異なる各地の遺跡から焼人骨が見つかる (図1)。後期新石器時代の埋葬はバリエーションに富み、単体や多体葬の土坑内埋葬や土器内埋葬、頭蓋骨はずしと並んで、火葬も埋葬形態の一つとしてその存在が認識されている (Akkermans and Schwartz 2003: 146-148)。しかしながら、これまで火葬に関する遺構や遺物の発見自体が稀であったため、いくつかの遺跡において火葬墓が複数発見されていながらも、他遺跡との類似性等について論及されるにとどまっている (e.g. Croucher 2012: 274-281; Soltysiak and Fazeli Nashli 2016: 10)。西アジア以外の地域との比較研究は、アナトリアとバルカン半島における火葬例の類似性について言及されているものの限定的である (Lichter 2017: 119)。さらに先史時代の火葬は埋葬行為の一方法でありながら、同時に儀礼的要素を多分に含んでいると考えられているため、社会的・儀礼的側面からの研究は多く行われているが、形態に関する研究はほとんど行われてこなかったと言える (e.g. Croucher 2012; Kuijt 2000; Bienert 1991)。

そこで、本稿は、テル・エル・ケルク遺跡で検出された

後期新石器時代の火葬墓を詳細に分析し、さらにほかの同時代遺跡の火葬墓と比較検討することにより、西アジアに特徴的あるいは共通した火葬形態を浮き彫りにすることを目的とする。

### 3. 分析方法

先史時代の遺跡から出土する被熱痕のある人骨は、その被熱が故意または事故によるものかを判別することが難しいため、単に焼人骨 (burnt bones) と称されることが多い。故意による被熱や埋葬を意図したものは、火葬 (cremation) と表すことが多く、火葬はしばしば焼人骨やそれに伴う遺構や遺物を含んだ埋葬全体の現象を示す言葉としても用いられる。また、火葬という言葉には儀礼的な意味合いが込められることが多く、単なる遺体処理法を指すだけでなく埋葬儀礼を示す言葉としても使用されている。

火葬は、焼人骨の最終的な埋葬場所により、一次火葬 (primary cremation) と二次火葬 (secondary cremation) に分類できる (Quinn et al. 2014: 30)。一次火葬は焼き場にそのまま埋葬された火葬を指し、二次火葬は焼き場とは別の場所に埋葬された火葬を指す<sup>3)</sup>。一般に埋葬研究で用いられる一次葬や二次葬の用語は、埋葬の段階を示すものであるのに対して、一次火葬と二次火葬の用語は埋葬場所が焼き場か否かの差を示す。焼人骨が焼き場から移動させ

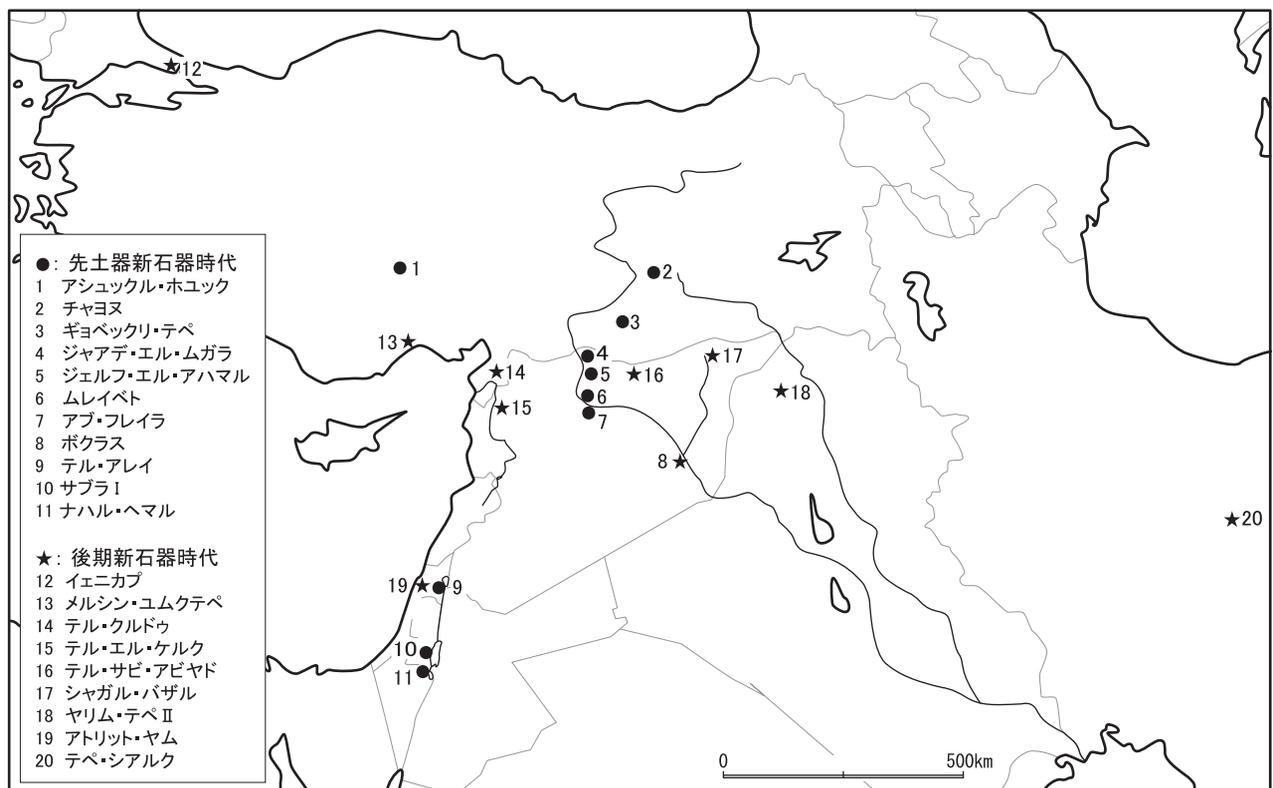


図1 西アジア新石器時代の焼人骨が出土した主な遺跡

られたか否かを区別することは、その社会にとって故人がどのような社会的意味を持っていたかを推論する重要な手掛かりであると考えられている (Quinn et al. 2014: 31; Cerezo-Román 2014: 162-166)。

古代の一般的な焼き場として、火葬場 (crematorium) と野焼き (pyre) の別がある。前者は火葬用の建物や場所を指す。西アジアの一次火葬においては焼き場に土坑を用いる例があり、火葬土坑 (crematorium pit) と呼称している。また、遺構を伴わない火葬場と野焼きを識別することは難しいため、遺構を伴わない焼き場を火葬場と呼ぶこともある (e.g. Merpert and Munchaev 1993: 212-215; Garstang 1953: 111)。火葬土坑は土坑底部や内壁に激しい被熱痕が見られ、覆土に焼人骨や灰、炭化物、炭化材を伴う場合に識別できる。被熱痕のある土坑と焼人骨がセットになった検出は、一次火葬の可能性が高いと考えられるが、焼人骨等が僅かな場合、二次火葬のために焼人骨の移動が行われた可能性も指摘できる。

西アジアにおける二次火葬は、土坑内埋葬や土器内埋葬、遺構が認められない焼人骨の集積として見つかった (e.g. Merpert and Munchaev 1993; Kızıltan and Polat 2013)。二次火葬の焼人骨の出土場所は、一般に最終的な埋葬場所と解釈されるが、二次葬や複葬と呼ばれる複数回の埋葬が盛んに行われていた西アジアにおいては、焼人骨が最終的な埋葬場所への移動前に何らかの理由で放棄されたり取り残されたりした可能性も考えられる。また、元々は一次火葬や二次火葬として埋葬されていた焼人骨が、建物や土坑等を作る過程において、他の場所へ移動させられる「片付け」が行われ、その結果、二次火葬と判断されることにも注意が必要と思われる。

焼人骨あるいは火葬に係る副葬品は、遺体とともに焼く副葬品 (pyre goods) と、火葬後の焼人骨に供献される副葬品 (grave goods) に区別することができる (Quinn et al. 2014: 29)。この分類は遺物が焼けた時期や共伴のタイミングにより明確に区別することは難しいが、被熱の有無や出土のコンテクストにより検証が可能な場合もある。

本稿では、初めに後期新石器時代の遺跡から発見されている火葬墓や焼人骨の検出場所について、一次火葬と二次火葬の概念を用いて分類し、次にテル・エル・ケルク遺跡で発見された火葬墓と焼人骨についても同様に分類し、火葬形態についての分析を試みる。そして、これらの分析結果を基に、西アジア新石器時代の火葬形態がどのように発展したかについて考察したい。

#### 4. 後期新石器時代の火葬例の検討

後期新石器時代の焼人骨や火葬として報告されている例の中には、アトリット・ヤム (Atlit-Yam) 遺跡やシャガ

ル・バザル (Chagar Bazar) 遺跡からの例のように、故意の被熱かどうか詳細が不明なため判別できないものがあり、これらは火葬例から除外した (Hershkovitz and Galili 1990: 325; Mallowan 1936: 44)。火葬墓や焼人骨が発見されている遺跡に、北イラクに位置するヤリム・テペ II (Yarim Tepe II) 遺跡 (Merpert and Munchaev 1993)、イラン高原のテペ・シアルク (Tepe Sialk) 遺跡 (Sołtysiak and Fazeli Nashli 2016)、北西アナトリアのイエニカブ (Yenikapı) 遺跡 (Kızıltan and Polat 2013)、南西アナトリアのメルシン・ユムクテペ (Mersin-Yumuk-tepe) 遺跡 (Garstang 1953) や北レヴァントのテル・クルドゥ (Tell Kurdu) 遺跡 (Özbal 2006; Yener et al. 2000)、バリフ河流域に位置するテル・サビ・アビヤド (Tell Sabi Abyad) 遺跡 (Verhoeven 2000) が挙げられる (図1)。焼人骨や埋葬遺構に遺構番号が記載されていない例がいくつか見られるため、本稿で記述する際には便宜的に表に記載の任意名を用いる (表1)。

一次火葬には、イエニカブ⑨⑩とユムクテペ①、サビ・アビヤド①の4例を分類できる。火葬土坑からの焼人骨の出土が2例、火葬場からが2例である。火葬土坑は2例ともイエニカブ遺跡で見つかり、双方とも直径1m以下の楕円形である (Kızıltan and Polat 2013: 125)。イエニカブ⑨の土坑は被熱により変色しており、焼人骨の下から炭化材が出土している。ユムクテペ①からの焼人骨は遺構を伴っておらず、発掘者はその場での火葬と位置づけている (Garstang 1953: 111)。サビ・アビヤド①については、建物を火によって故意に破壊する行為に伴う埋葬儀礼と考えられており、通常の埋葬とは異なるとの見解が出されている (Verhoeven 2000: 48-56)。一次火葬に分類した4例とも副葬品を伴っている。その内3例に土器が含まれており、サビ・アビヤド①については大型土製品の間から焼人骨が発見されている。土器の被熱痕の有無については不明であるが、イエニカブ⑨の土器1点は焼人骨の下から出土した。

二次火葬にはイエニカブ①~⑧、クルドゥ①~④、ヤリム・テペ①~⑦、シアルク①~⑦の26例を分類できる。そのうち、土坑からの焼人骨の出土が5例、土器からの出土が18例、集積としての出土が3例である。イエニカブ遺跡とテペ・シアルク遺跡には土坑からの出土例がなく、テル・クルドゥ遺跡とヤリム・テペ II 遺跡には土坑と土器からの両者の出土例がある (Kızıltan and Polat 2013; Ghirshman 1939; Yener et al. 2000; Merpert and Munchaev 1993)。

焼人骨が出土した土坑の大きさは、クルドゥ①では小型という以外は不明だが、ヤリム・テペ II 遺跡の4例は、直径1m前後×0.3m前後のいずれも楕円形である。ヤリ

表1 後期新石器時代検出の火葬分類

任意名	遺跡名	年代/レベル	発掘場所	遺構名	一次火葬			二次火葬			副葬品・特記事項	焼人骨の年齢・性別	検出場所	
					火葬土坑	火葬場		土坑	土器	集積				
イエニカブ①	イエニカブ	Neolithic period (Yarimbura gaz 4 style)	セトルメント エリアの東 約100m	—					○		—	—	集落外	
イエニカブ②										○		—	—	集落外
イエニカブ③											○		—	集落外
イエニカブ④												○	—	集落外
イエニカブ⑤												○	—	集落外
イエニカブ⑥												○	—	集落外
イエニカブ⑦												○	—	集落外
イエニカブ⑧					上記イエニカブ①~⑦の南東約50m	—					○	—	—	集落外
イエニカブ⑨					上記イエニカブ⑧の西約15m	cremation pit No. 1	○					土器:2 (土坑:楕円形(0.95m×0.84m))	—	集落外
イエニカブ⑩						cremation pit No. 2	○					貝製ビーズ:38、土器:1 (土坑:楕円形(0.81m×0.64m))	—	集落外
ユムクテベ①	メルシン・ユムクテベ	Level XIX	Area234	(vi)		○				壺型土器:2	成人(男性):1	集落内?/—		
クルドゥ①	テル・クルドゥ	Amuq C	北丘 Trench 7	—				○		暗色土器(破砕):1	—	集落内/屋外?		
クルドゥ②		Later Phase	北丘 Area E	burial 25:8				○		—	成人(20-40歳・女性?):1	集落内/壁内		
クルドゥ③				—				○		—	クルドゥ②と同一個体?	集落内/壁内		
クルドゥ④				—					○		—	クルドゥ②と同一個体?	集落内/壁内	
サビ・アビヤド①	テル・サビ・アビヤド	Level 6	Operation I Burnt Village	Room 7, Building V		○				大型楕円形土製品	成人(男性):1 成人(30歳以上・女性):1	集落内/屋内		
ヤリム・テベ①	ヤリム・テベ II号丘	Level 7		Burial 40				○		【土坑内西側】 黒曜石製ビーズ:20(焼人骨共伴・土器内出土)、カップ破片、土器:2、石製容器:2、石製印章ペンダント:1、プレート:1、骨製ペンダント破片 【土坑内東側】 ミニチュア土器:2、石製容器:1、双円錐型土製紡錘車破片、タカラガイ:2、石膏製ビーズ:26、双円錐型黒曜石製ビーズ:13、丸平型ビーズ:15(黒曜石製:5・水晶製:8・土製:27)	10-13歳:1	集落内/屋外		
ヤリム・テベ②				Burial 43				○		—	約10歳:1	集落内/床下		
ヤリム・テベ③		Level 8-9	Square no.23	Burial 50			○			【土坑内北端】 彩色土器2点の破片 (土坑:楕円形(0.7m×0.3m))	成人:1	集落内/屋外		
ヤリム・テベ④				Burial 51				○		彩色土器片 (円形エリア:直径0.9-1.0m)	成人:1	集落内/屋外		
ヤリム・テベ⑤				Burial 52			○			— (土坑:楕円形(0.25m×0.35m))	小児:1	集落内/屋外		
ヤリム・テベ⑥				Burial 53			○			— (土坑:楕円形(1.16m×0.53m))	小児:1	集落内/屋外		
ヤリム・テベ⑦				Burial 54			○			彩色容器の小片(被熱痕有) 【土坑内北端】 土器(破砕):3 【土坑内中央】 双円錐型土製紡錘車:2、骨製小片:1、平型磨製の赤色石 (土坑:楕円形(1.25m×0.5m))	—	集落内/屋外		
シアルク①	テベ・シアルク	Period I	north mound, Trench II	—				○		—	乳児(低年齢):1	集落内/屋外		
シアルク②				—				○		—	乳児:1	集落内/屋外		
シアルク③		Sialk 1.4 (Late Neolithic II)	trench V	C5091				○		—	乳児:1	集落内/屋外?		
シアルク④				C5102				○		—	約15歳:1	集落内/屋外?		
シアルク⑤				C5110				○		—	成人(25-30歳):1	集落内/屋内		
シアルク⑥				C5112				○		—	成人(30-50歳・男性?):1	集落内/屋内		
シアルク⑦				C5113a,b				○		—	成人(女性?):1	集落内/屋内		

—:不明あるいはなし

ム・テベ⑦の土坑には壁面と底面に泥プラスターが貼られており、そこには被熱痕が認められるが、土坑中の灰層と焼人骨の位置から二次火葬と位置づけられている (Merpert and Munchaev 1993: 212)。土坑から出土した人骨の年齢は5例中3例が判明しており、いずれも単体で成人と小児ともに含まれていた。土坑からの副葬品は5例中3例にみられ、3例ともに土器や土器片が含まれていた。また、これらの土器は故意に破砕されたと考えられている (Yener et al. 2000: 208; Merpert and Munchaev 1993: 212)。

土器から焼人骨が発見された例について、ヤリム・テベ①では、発掘者は土器が出土した被熱痕のある土坑を火葬土坑とみなし、これを一次火葬と位置付けている。また、ヤリム・テベ②についても、焼人骨が納められた土器が出土した遺構と近接する場所に検出された土坑で火葬が行われたとして、一次火葬と位置付けている (Merpert and Munchaev 1993: 215-217)。しかしながら、ヤリム・テベ①の焼人骨を納めた土器が火葬土坑に埋納されたと推測できるとしても、焼人骨は土器に移動されたために二次火葬に分類するのが妥当と考える。また、ヤリム・テベ②については、出土した焼人骨と火葬土坑の直接的な関係を示す証拠はなく、焼人骨は土器に納められたため、本稿では二次火葬に分類した。

イエニカブ遺跡検出の7点すべてはおおよそ並んで同一地点から、クルドゥ②~④は近接する建物遺構の壁から、ヤリム・テベ①②は同レベルの同発掘区から、シアルク①はシアルク②と別の非焼人骨埋葬2例とともに同一場所から発見された。シアルク①以外はいずれも複数の土器内埋葬が近接する位置に出土している。焼人骨が納められていた土器の種類や形状については、シアルク③~⑦以外は壺形であり、彩色や無彩色、磨研や粗製土器が用いられていた。土器出土の焼人骨の年齢性別については11例について判明している。このうち、クルドゥ②~④の焼人骨は同一個体の可能性が指摘されており、儀礼のために焼人骨が3点の土器に分けられたと推測されている (Özbal 2006: 274)。いずれにせよ1つの土器に1個体以上の人骨が納められた例は認められない。副葬品はヤリム・テベ①のみに出土している。多数の遺物が焼人骨とともに土器内やその土器が出土した土坑内で共伴しており、さらに土器や石製容器に故意の破砕、また被熱痕のある土器も確認されている (Merpert and Munchaev 1993: 215)。また、ヤリム・テベ②の焼人骨が納められた土器からの出土ではないが、それ自体が焼かれた火葬土坑と考えられている遺構からは破砕された石製容器や土器が複数出土しており、これらは火葬中に儀礼行為の一種として投げ入れられ、そのまま埋納されたと考えられている (Merpert et al. 1977: 91)。

土坑と土器以外から出土した二次火葬例は、遺構を伴わ

ない集積として分類した。シアルク②はシアルク①と同場所から出土したため埋葬と考えられるが、詳しい検出状況は分からず、攪乱や片付けの可能性も考えられる (Ghirshman 1939: 10)。イエニカブ⑧とヤリム・テベ④は土器片が共伴しており、これらは故意の破砕を受けていると考えられている。しかし、両者の解釈には違いがみられる (Kızıltan and Polat 2013: 124-125; Merpert and Munchaev 1993: 212)。イエニカブ⑧の土器片は、焼人骨と土器の個体数から焼人骨が納められた土器が破壊され、散乱したものと解釈され、一方でヤリム・テベ④の土器片は、ほかの場所で火葬された際に儀礼として土器の破砕が行われた後、焼人骨とともに動かされたものとして解釈されている。

管見のまとめでは、これまでに西アジアの後期新石器時代の遺跡で発見された火葬例は、6遺跡30例にのぼる。このうちの4遺跡で複数の火葬例が発見されている。一次火葬、二次火葬ともに、同遺跡において同文化層の近接した場所で、土坑内埋葬や土器内埋葬といった同一種類の火葬例が複数発見されている場合、同時期に複数の焼人骨を同一方法で埋葬したことが窺える。火葬墓や焼人骨の検出場所は、イエニカブ遺跡のみ火葬墓以外の遺構が検出されていないため集落外と考えられる場所で検出され、それ以外の遺跡においてはおそらく居住域と考えられる集落内で見つかっている。集落内では屋外からの検出が11例、屋内から8例で検出場所に建物内外の差は認められなかった。一次火葬は全30例中わずか4例のみで、サビ・アビヤド①は、建物の廃棄に伴う儀礼に関連する火葬と考えられており、他の例とは検出状況が異なっていた。二次火葬は26例中、土坑内埋葬が5例、土器内埋葬が18例、集積が3例で、土器内埋葬が約69%を占める。土器内埋葬は土器が出現した後期新石器時代以降の埋葬によく見られ、焼人骨を納めるためにも頻繁に用いられたことが分かった。クルドゥ②~④においては、焼人骨を納めた土器が壁内から出土したことから、建物への埋納物 (foundation deposit) として焼人骨が用いられたという儀礼的見解が出されている (Özbal et al. 2004: 46-47)。

副葬品は全30例中8例に認められ共伴率は約27%である。一次火葬は全ての例において副葬品が共伴しているが、二次火葬は26例中4例のみ (約15%) で、共伴率に差異が認められた。二次火葬の副葬品は4例とも土坑内から出土し、またヤリム・テベ①においては土坑内からの他に焼人骨が出土した土器からも副葬品が発見された。ヤリム・テベ①の火葬土坑に見つかった副葬品は、数量・種類ともに他例に比べ格段に多く、ヤリム・テベ②で火葬土坑と考えられている遺構からの副葬品と合わせて特殊性が窺われた。発掘者の見解通りヤリム・テベ①とヤリム・テベ

②が火葬土坑であるとするならば、副葬品は焼人骨が動かされたあとの火葬土坑自体への埋納と解釈することができる (Merpert and Munchaev 1993: 215)。

以上のように、一次火葬は発見数が少ないものの、火葬土坑と火葬場の2種類に分類でき、副葬品にも特徴が見られた。二次火葬は焼人骨が出土した場所を3種類に分類できた。これらの分類を基に、テル・エル・ケルク遺跡で発見された火葬墓について分析を試みたい。

5. テル・エル・ケルク遺跡における火葬例の検討

テル・エル・ケルク遺跡では、2007年から2010年の発掘調査により、中央区から後期新石器時代の墓地が発出された (Tsuneki 2011: 2-5; 常木 2008, 2011; 常木ほか 2009; 常木・長谷川 2010)。この墓地では9つの火葬例に少なくとも44体の焼人骨が見つまっている。墓地はエル・ルージュ 2c 期 4~6層にわたっているが、火葬例のほとんどは

5~6層で発見されている<sup>4)</sup>。火葬の発見された場所は、墓地全体で見るとその南東部分で比較的まとまって検出されている (図2)。

ケルク墓地における火葬には一次火葬と二次火葬がともに認められた。一次火葬としてC-5・C-6・C-9の少なくとも3例17体が分類される (表2、図3)。これらはすべて火葬土坑内に焼人骨が伴う状態で発見された。土坑覆土には焼人骨と灰、炭化物や炭化材が含まれており、土坑内壁面と底部は焼けてオレンジ色に変色していた。C-6の土坑は2枚の床面が認められた。おそらく古い時期の土坑が火葬場として使用された後に、その上部を東側に拡張して再度火葬場として使用されたと思われる。新しい時期の北西部分の壁面に白色プラスターが一部残存していた。C-9の土坑底部には非常に薄い黒色の有機物が認められた。C-5とC-6の焼人骨は比較的保存状態が良く、多くが高温で焼かれたことを示す白色や青白色に変色していた。ま

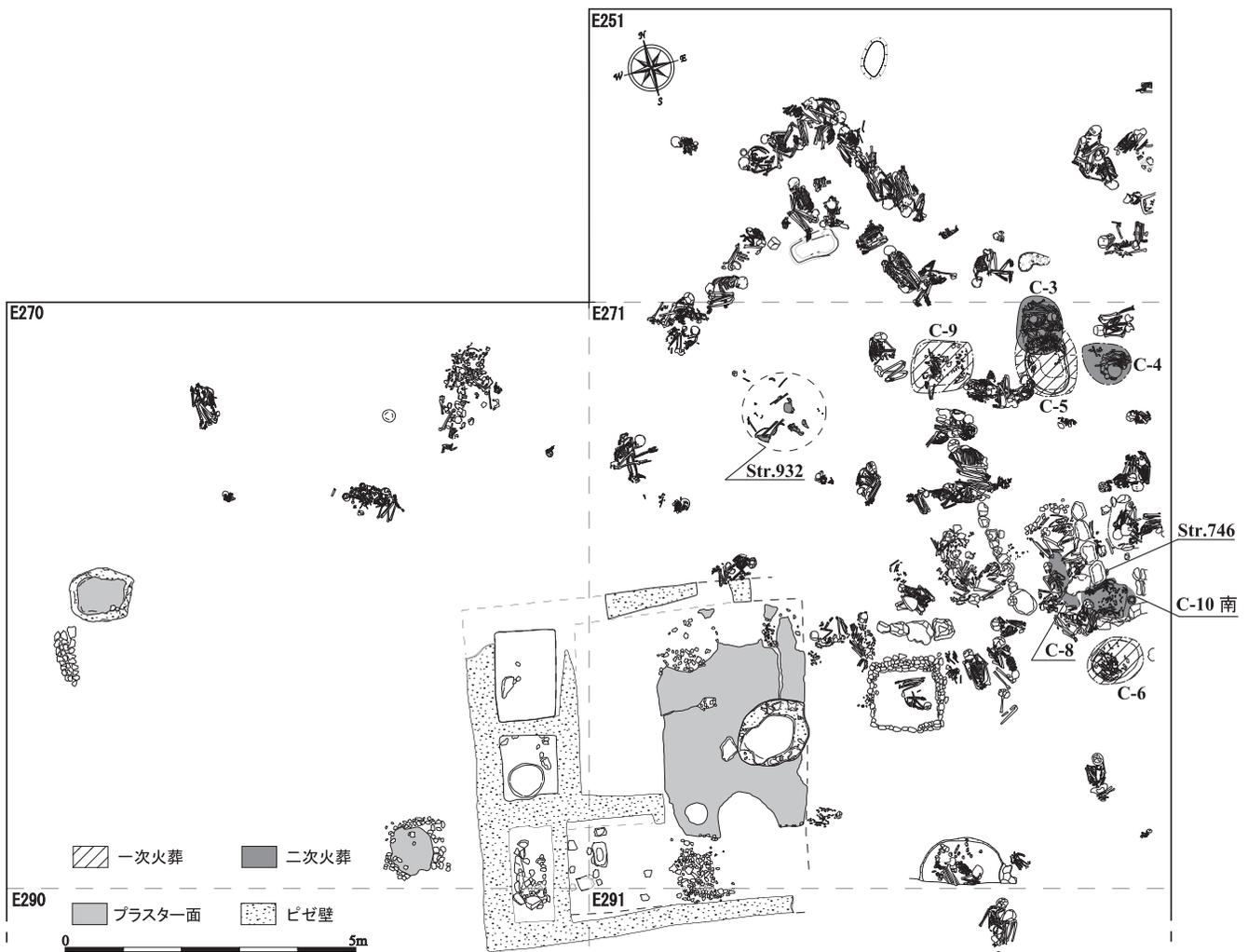


図2 テル・エル・ケルク遺跡検出のケルク墓地全体図 (筑波大学・シリア文化財博物館総局テル・エル・ケルク合同調査団 2011: 4-5を改変)

た、頭蓋骨や長骨は破損が少なく原形を保っていたものが多かった。C-9の焼人骨はC-5とC-6の焼人骨に比べて白色に変化している割合が高いが、土坑際には低温で焼かれたと考えられる黒色や濃褐色の焼人骨も見られた。3例とも焼人骨は灰や炭化物に混ざって出土しており、別の場所で焼かれた後にこれらの土坑に動かされた痕跡は認められなかった。また、複数個体の長骨や頭蓋骨の一部が、土坑内部の1ヶ所にまとまって出土したことから、遺体は火葬前に白骨化あるいはある程度腐敗し関節がはずれた状態だったと考えられる。それらの遺体あるいは人骨を複数個

体集めて、同時に火葬したことが推測される (Hironaga 2011: 13-17)。

一次火葬の3例に共通して、土坑直上に土器や石球、小石列といった遺物や遺構が発見された (図4)。C-5に伴う土器2点のうち1点からは、骨製スタンプ印章が出土した。C-6では小石列のそばに炭化コムギがまとまって出土し、出土地点に被熱痕が見られた。さらにC-6の土坑底部からは壺形の完形土器が1点出土し、中から2粒のエンマーコムギが見つかったことから供献品としてコムギが用いられていたことが窺える。石球は直径約14cmの石

表2 テル・エル・ケルク遺跡検出の火葬分類

遺跡名	レベル	発掘区	遺構名	一次火葬		二次火葬			副葬品・特記事項	焼人骨の年齢・性別	非焼人骨の混在	検出場所
				火葬土坑	火葬場	土坑	土器	集積				
テル・エル・ケルク	4	E271b	str.746					○	—	小児:2	無	集落内/屋外
	5	E251d, E271b	C-3					○	—	成人(男性):1 成人(女性):2 成人:2 小児:1	有	
	5	E271b	C-4					○	—	成人:1	有	
	6	E271a	str.932					○	—	成人(男性):1 準成人:1 小児:1	有	
	6	E271b	C-5	○					【土坑直上】土器(DFBW):2、骨製スタンプ印章:1 【土坑:楕円形(約1m×1.2m)・深さ約0.4m)	成人(男性?):3 成人(女性?):2	無	
	6	E271d	C-6 上層	○					【土坑直上】石列、炭化コムギ 【土坑:楕円形(約1.0m×0.8m)・深さ約0.2m)	成人(女性):2	無	
	6		C-6 下層	○					土器(DFBW):1 【土坑:楕円形(約0.6m×0.6m)・深さ約0.3m)	成人:1 小児:4		
	6	E271d	C-8					○	フリント製ドリル:2	成人(老年):1 成人(若年):1 成人:2 準成人:1 小児:2 乳児:1	無	
	6	E271b	C-9	○					【土坑直上】石球:1 【土坑底部】黒色有機物 【土坑:長方形(約1.0m×0.9m)・深さ約0.15m)	成人:3 準成人:1 小児:1	無	
	6	E271b	C-10南					○	土器(DFBW):1	不明:6	無	

—:不明あるいはなし

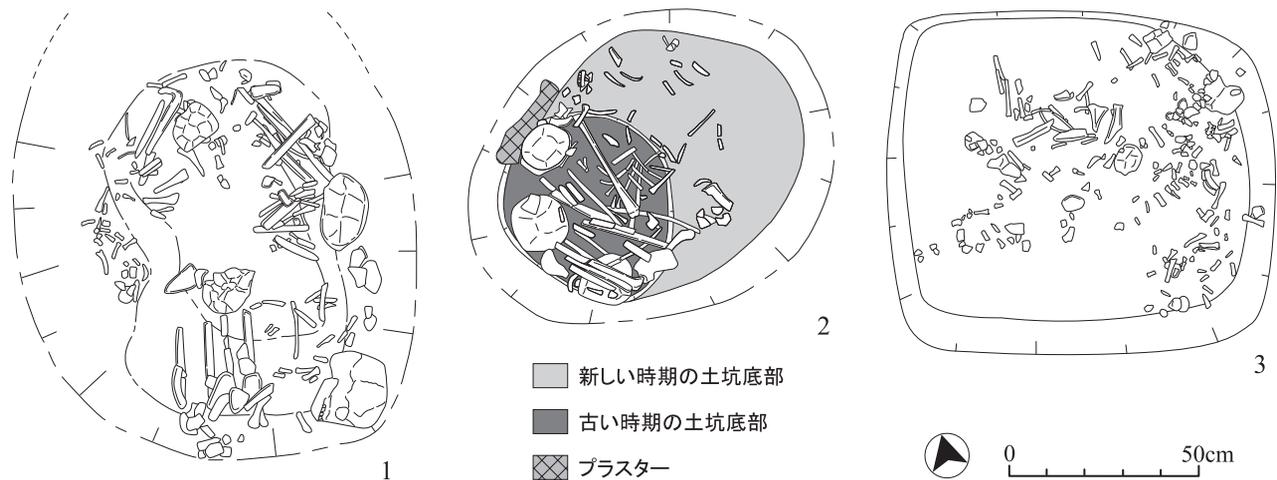


図3 テル・エル・ケルク遺跡の火葬土坑 1. C-5 2. C-6 3. C-9

(筑波大学・シリア文化財博物館総局テル・エル・ケルク合同調査団アーカイブの図面を筆者トレース)

灰岩製とみられ、表面は丹念に磨かれほぼ正円球である。同様の石球はケルク墓地の一次葬と二次葬の人骨が複数出土した埋葬近くからも出土しているが、それ以外でテル・エル・ケルク遺跡での出土は報告されていない。これらの遺物や遺構は、火葬後に土坑内の炭化材や炭化物の混ざった灰や人骨の上に置かれたり、設置されたりしたと考えられ、土坑を一つの墓と見做した行為として捉えることができる。また、死者への供献品のほかに墓標のような役割も推測できる。

一次火葬では焼人骨 17 体中、成人で男性の可能性が高いものが 3 体、成人で女性もしくは女性の可能性が高いものが 4 体、成人で性別不明が 4 体であった。また、準成人が 1 体、小児が 5 体出土している<sup>5)</sup>。成人において性別による差異は見られず、1 歳以下の乳児骨や胎児骨は出土していない。C-5 は成人のみだが C-6 と C-9 には小児骨も出土しており、同時に火葬される人骨に、特定の年齢性別の偏向は見られなかった。C-6 の古い時期の土坑に新しい

時期の土坑からの落ち込みが考えられるため、古い時期の土坑と新しい時期の土坑より出土した人骨は合計して 7 体であるが、おそらく 2~5 体の人骨が一つの土坑で火葬されたと考えられる。

二次火葬としては、6 例 26 体が分類される (表 2)。そのうち土坑からの出土が 4 例 16 体、集積としての出土が 2 例 10 体である (図 5)。焼人骨が出土した土坑には被熱痕は見られず、C-10 南以外は土坑内に非焼人骨と焼人骨の混在が見られた。C-3 と C-4 の土坑の検出状況は非常に似ている。C-3 は約 1 m×0.7 m の楕円形の土坑内に少なくとも 12 体が、C-4 は約 0.8 m×0.7 m の楕円形の土坑内に少なくとも 6 体が密接に重なっており、どちらも焼人骨と非焼人骨が混在していた。焼人骨は両者ともに高温で焼かれたことを示す青白色に変化していた。ただし、両者には焼人骨の人数や非焼人骨との比率に差異が見られた。Str. 932 から焼人骨と非焼人骨とが混在して出土した。Str. 932 の土坑内からは少なくとも 7 体の人骨が発見

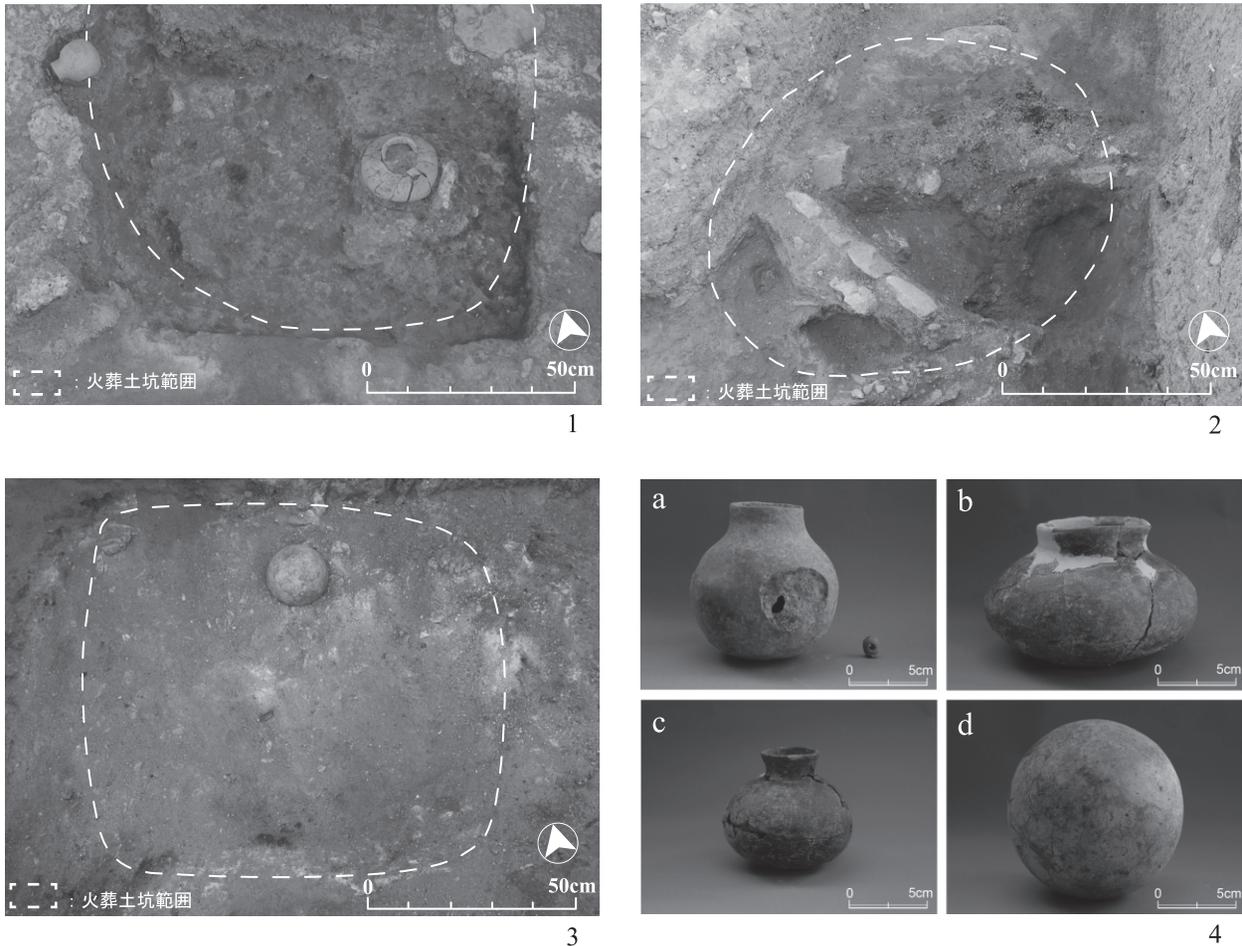


図4 ケルク墓地検出火葬土坑直上出土副葬品

1. C-5 2. C-6 3. C-9 4-a. C-5 出土土器とスタンプ印章 4-b. C-5 出土土器 4-c. C-6 出土土器 4-d. C-9 出土石球 (筑波大学・シリア文化財博物館総局テル・エル・ケルク合同調査団アーカイブの写真に筆者加筆)

され、このうち3体が焼人骨である。焼人骨は低温で焼かれたことを示す褐色や高温で焼かれたことを示す青白色を呈する。同土坑は下層に検出された遺構の一部を掘り込んでおり、また、土坑直下で一次葬の攪乱とみられる人骨が2体出土しているが、検出状況から焼人骨は二次火葬と位置づけられる。Str. 932はC-3やC-4と異なり、土坑内に人骨が散らばっており、密接な重なりは見られなかった。墓地の中で最も古い時期の墓の一つであるC-10南の土坑からは、細かい破片になった焼人骨がまとまって発見され、その土坑内では完形の暗色磨研土器の壺が発見された。この土器の内部からは炭化したエンマーコムギ等が数十粒出土している。これは前述のC-6の古い時期の土坑に見つかった土器から炭化コムギが出土した状況と類似している。同遺構では非焼人骨との混在は見られず、焼人骨は高温で焼かれたことを示す薄い乳白色から青白色を呈する。

二次火葬の中で集積として分類されたのは2例10体である。Str. 746は小児の主に頭蓋骨と長骨の一部が出土した。片付けや攪乱を受けた可能性も考えられるが、西アジア新石器時代の二次葬において頭蓋骨と長骨をまとめて埋葬する例が多く見られることから、二次葬である可能性は高いと思われる (e.g. Bienert 1991; Kuijt 1996)。C-8の焼人骨はほとんどが白色で細かい破片となっており、非常に脆いことから高温で焼かれたと考えられる。出土地点に遺構や被熱痕は認められず、焼人骨は別の場所での火葬後にこの場所に動かされたと考えられる。同レベルの近接する場所に灰や炭化物を含んだ焼成遺構が発見されているが、人骨が出土していないため、C-8の焼人骨が焼かれた場所は明らかではない。およそ1.5m×0.5mの範囲で集積が見られ、一個体のまとまった頭蓋骨片には数片の土器片が被せられていた。これは、後期新石器時代の西アジアに広く

見られる人骨に土器片を被せる土器被せ葬と考えられる (Akkermans 2008: 623-624; Gerritsen and Sholts 2004: 71)。

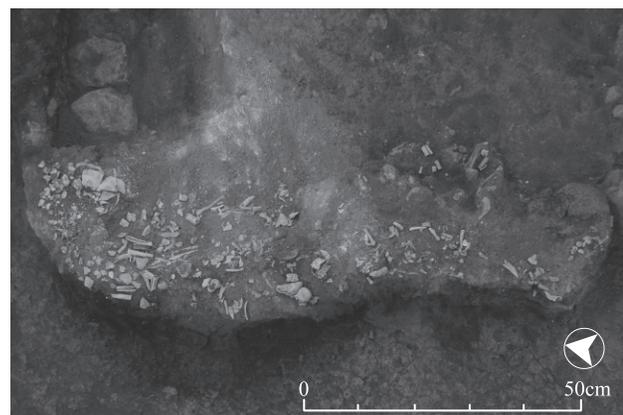
二次火葬に伴う共伴品はC-8とC-10南にのみ見られた。C-8のフリント製ドリルは2点とも焼人骨片の間に見つかった。また、C-3とC-4の土坑内からはビーズや土製品が出土しているが、出土位置から焼人骨とは共伴しないと考えられる。

以上、ケルク墓地で確認された火葬例について述べたが、このほかにも同じく中央区のエル・ルージュ2d期層から、わずかな焼人骨を含む土坑が1基発見されている (Tsuneki et al. 1998: 10)。この土坑からは儀礼に関連する遺物が出土しており、また近接する場所に人骨が共伴していない同様の儀礼土坑が検出されていることから、これは儀礼土坑として位置づけられるため、埋葬である火葬からは除外した。

テル・エル・ケルク遺跡で発見された一次火葬は火葬土坑と火葬場の二種類に分類できた。火葬土坑は、現在までに後期新石器時代のイエニカブ遺跡からのみ検出されている。両者は火葬土坑の大きさや被熱痕の状態、土器内からの副葬品の出土に類似性がみられた。焼人骨の出土状況について、イエニカブ遺跡では詳細が不明であり、人骨の個体数や年齢、性別は比較できない。テル・エル・ケルク遺跡で発見されている火葬土坑直上の副葬品は、現在までのところ後期新石器時代に唯一の発見例である。また、同遺跡では、火葬土坑以外の火葬場は発見されていない。二次火葬の土器内埋葬は、後期新石器時代の遺跡で多く用いられているが、テル・エル・ケルク遺跡では土器被せ葬のみ見られた。同遺跡における二次火葬では、焼人骨と非焼人骨が混在する例と焼人骨のみ出土した例が同数見つかっているが、混在する例は後期新石器時代の他遺跡には見られ



1



2

図5 ケルク墓地検出二次火葬 1. C-3土坑内埋葬 2. C-8焼人骨集積  
(筑波大学・シリア文化財博物館総局テル・エル・ケルク合同調査団アーカイブの写真に筆者加筆)

ず希少である。また、二次火葬の土坑内埋葬において、テル・エル・ケルク遺跡のC-10南とヤリム・テベ③~⑦の焼人骨は破片が散らばっている点は類似がみられるが、前者は複数個体、後者は単一個体のみ出土しており、土坑内に出土した土器について前者は完形であったが後者は破片だった点に違いがみられた。集積として出土した2例ともに非焼人骨との混在は見られなかった。ケルク墓地検出の火葬墓への副葬品の共伴率は、全10例中6例の60%、そのうち一次火葬は4例中4例の100%、二次火葬は6例中2例の約33%だった。後期新石器時代の他遺跡における共伴率より、全体と二次火葬においては高いが、全体数の違いがあるため単純な比較は妥当ではない。しかしながら、一次火葬においては両者ともにすべての例に共伴物が発見され、二次火葬よりも共伴率が明らかに高いことが認められた。テル・エル・ケルク遺跡の火葬に共伴する遺物としては、共伴する6例中3例で土器が出土しており最も多い。イエニカブ遺跡やテル・サビ・アビヤド遺跡、ヤリム・テベII遺跡にみられたビーズや土製品は発見されていない。また、一次火葬の共伴品について、土坑上に出土したものに関しては火葬後に供献された副葬品 (grave goods) と考えられ、C-6の土坑底部で出土した土器は、焼人骨や炭化材、炭化物や灰の下から見ついているために火葬前にあらかじめ置かれて火葬時に焼かれた副葬品 (pyre goods) と位置付けられる。ヤリム・テベII遺跡やテル・クルドゥ遺跡から出土した故意の破碎を受けたと考えられる共伴品は、テル・エル・ケルク遺跡においては認められなかった。

## 6. 考察とまとめ

### 6-1 先土器新石器時代の焼人骨例とその特徴

次に後期新石器時代の火葬がどのように行われるようになったかについて、後期新石器時代の前代である先土器新石器時代の遺跡で発見されている焼人骨の出土例から考察したい。

西アジアでは終末期旧石器時代にはすでに、少数ではあるが南レヴァントのケバラ洞窟 (Kebara Cave) (Turville-Petre 1932; Bar-Yosef and Sillen 1993) やワディ・ハンメ27 (Wadi Hammeh 27) (Webb and Edwards 2002)、アナトリアのベルディビ洞窟 (Beldibi Cave) (Bostanci 1959) から被熱痕のある人骨片が見つかっている。これらの焼人骨の被熱については故意か偶発的なものかは見解が分かっているが、ケバラ洞窟の焼人骨について発掘者は遺体と火に一定の結び付きが認められると述べている (Bar-Yosef 1993: 207)。

先土器新石器時代 (PPNA期・PPNB期) には前代の地域に加え、ユーフラテス河中流域に位置する遺跡からも

焼人骨が見つかっている (図1)。これらの中にはサブライ (Sabra I) (Gebel 1988: 78)、ナハル・ヘマル (Nahal Hemar) (Arensburg and Hershkovitz 1988: 50)、ムレイベト (Mureybet) (Özbek 1976: 161)、アブ・フレイラ (Abu Hureyra) (Moore et al. 2000: 280)、ギョベクリ・テペ (Göbekli Tepe) (Gresky et al. 2017: 7) のように故意に焼かれたものかどうか不明なものも多い。

一方で故意に人骨を焼いたと考えられる証拠も発見されている。アナトリアに位置するアシュックル・ホユック (Aşıklı Höyük) では炉床がある部屋の床下から被熱痕のある26体の人骨が発見された。焼人骨には成人男女、子供ともに含まれていた。炉と埋葬の関連性は不明である (Le Mort et al. 2000: 46; Özbek 1998)。チャヨヌ (Çayönü) ではスカル・ビルディング (Skull Building) の上層 (BM2b) から71点の被熱痕のある頭蓋骨や頭蓋骨の一部が見つかっている。またそれより早い時期の層 (BM1a) にも多くの焼人骨が見つかっている。これらの建物は故意に焼かれており、その火災によるものとみられている。さらにBM1aと同時期の層 (c2) の建物内の土製ベンチにもマットにくるまれた屈葬の焼人骨が見つかっているが、故意の被熱かは不明である (Özdoğan 1999; Le Mort 2000)。ユーフラテス河中流域に位置するジェルフ・エル・アハマル (Jerf el-Ahmar) からは、底部に被熱痕のある3点の頭蓋骨が石で覆われた炉床の上から出土している (Jammous and Stordeur 1996: 28; Stordeur et al. 1997: 284; Stordeur and Abbès 2002: 583)。また、ジャアデ・エル・ムガラ (Dja'de el-Mughara) からは被熱痕のある2点の頭蓋骨が床下から見つかっている (Le Mort et al. 2000: 46)。ボクラス (Bouqras) では遺体置場 (Charnel house) と呼ばれる建物遺構に被熱痕のある人骨が出土している (Merrett and Meiklejohn 2007; Akkermans et al. 1983)。この被熱は建物を故意に焼失させるための儀礼に関連したもので、埋葬を意図したものではないという見解もある (Merrett and Meiklejohn 2007: 136)。南レヴァントに位置するテル・アレイ (Tel Ely) では動物骨や角の一部とともに焼人骨が見つかっており、これは明らかに儀礼的埋納物を示すと解釈されている (Haas 1974: 36)。

二次葬は先土器新石器時代に盛んに行われていた埋葬方法であり、上記の焼人骨が見つかった遺跡では、同時期の出土として頭蓋骨のない手足を広げた人骨 (ジェルフ・エル・アハマル)、頭蓋骨が外された人骨 (テル・アレイ)、埋葬のための建物であったと考えられている「死者の家 (Maison des Morts)」 (ジャアデ・エル・ムガラ) や「スカル・ビルディング」 (チャヨヌ)、大量の床下埋葬 (アシュックル・ホユック) といった人骨や遺構が見つかっており、これらは頭蓋骨崇拜や何らかの儀礼の存在を示すも

のとしてよく知られている。また、建物を故意に焼く行為はこの時代の遺跡にしばしば見られ、火を用いた儀礼の一種と考えられている (Croucher 2012: 274-176)。

先土器新石器時代の事例において検出状況の詳細が不明な例を除くと、故意に焼かれた建物遺構内から出土する場合と被熱痕が認められない場所から出土する場合に分けられる。前者は2例あり、焼かれた後に動かされていないため一次火葬と位置付けられる。しかしながら、両者ともに人骨は儀礼行為である故意の建物焼失に伴う被熱と捉えられるため、埋葬行為を主眼にした行為ではないと推測できる。ただし、建物を焼失させる行為自体が埋葬儀礼を含んでいた可能性は考えられる。後者は4例である。その内の2例は炉床付近で見ついている。人骨が炉の火によって焼かれたとするならば、一次火葬に分類できるが、炉が被熱の原因であるか否かは不明であるため、二次火葬に分類するのが妥当と考える。検出状況からほとんどの例が頭蓋骨崇拝や儀礼行為を示唆している。

以上のように、先土器新石器時代に出土した故意の被熱によるものと考えられる焼人骨のほとんどは建物内や建物床下から出土しており、多くの例で儀礼や二次葬との関連が認められた。先土器新石器時代には、儀礼に火を用いる行為と儀礼的要素を多分に含んだ二次葬の発展が結びついた結果、儀礼的行為を内包する人骨を焼く火葬が行われ、最終的に二次葬と同様の方法で埋葬したことが推測できる。

## 6-2. 新石器時代における火葬形態の変遷

焼人骨が発見されている遺跡は、先土器新石器時代には中央アナトリアからユーフラテス河中流域、南レヴァントに分布し、後期新石器時代にはアナトリア北西部やイラン地域にも広がりを見せる (図1)。後期新石器時代にはバルカン半島に位置する遺跡にも火葬が報告されていることから、西アジア一帯とその近隣地域において、広く火葬が行われていたことが窺われる (Gallis 1982; Bacvarov 2004)。

先土器新石器時代から後期新石器時代の焼人骨や火葬墓の出土状況には、時期によっていくつかの共通する特徴がみられた (表3)。検出状況の詳細が分かっているものに関しては、紀元前9千年紀までは屋内に焼人骨が出土し、炉との関係を窺わせるものもみられた。紀元前8千年紀になると埋葬用と考えられている建物遺構内でも焼人骨が出土している。詳細が分かっている例は少ないが、埋葬場所については先土器新石器時代における火葬以外の埋葬人骨の出土場所と一致していることが窺える (e.g. Akkermans and Schwartz 2003: 145-149; Koutsadelis 2007: 40-121)。紀元前7千年紀の後期新石器時代に入ると、焼人骨が屋内に埋葬される例は減少し、集落外や集落内のオープンス

ペースに埋葬される例が増加する。後期新石器時代の遺跡で最も早い時期に火葬が発見されているテル・エル・ケルク遺跡には、焼人骨への土器片被せ埋葬は見られるものの焼人骨の土器内埋葬は見られていない。紀元前6千年紀の遺跡においては焼人骨の土器内埋葬が各地域に広くみられるようになり、時期による差異を示唆している。建物に関連する儀礼との関わりが考えられている火葬はテル・サビ・アビヤド遺跡で検出されており、先土器新石器時代からの継続性がみられた。また、火葬後に焼人骨を別の場所へ移動させる二次火葬は、新石器時代を通して西アジアで継続的に行われていたと考えられる。

二次火葬として検出された焼人骨は、焼かれてから最終的に埋葬される間の状態や置き場所等を知ることは難しいが、焼人骨が例えば頭蓋骨崇拝に代表される何らかの儀礼に用いられていたことは、被熱痕のある頭蓋骨のみの出土や動物骨や角と共伴する焼人骨から推論できる。おそらく人骨を焼く行為と儀礼は直接結びついており、何らかの儀礼が行われた後に、最終的に埋葬されたため、二次火葬として検出されたのではないかと考える。それらの人骨はおそらく、死後、遺体が白骨化あるいはある程度腐敗が進んだ状態で焼いたことが窺われ、二次葬とも深く関係していたと考えられる。先土器新石器時代に検出された一次火葬は埋葬に主眼が置かれたとは考え難いために、埋葬としての一次火葬は後期新石器時代に初めて出現したと推定できる。焼いた後に焼人骨を別の場所へ移動させずにそのまま埋葬する一次火葬は、焼く行為と埋葬する行為の間に埋葬儀礼以外の儀礼が存在しなかったことを窺わせる。テル・エル・ケルク遺跡において火葬土坑上にみられた副葬品は、埋葬儀礼を主眼とした火葬への供献を示唆するものとして考えられる。

以上のことから、先土器新石器時代には二次葬の中で焼人骨が取り扱われていたことが明らかになった。そして、後期新石器時代には前代の二次火葬の方法を継承しつつ、同時代に出現した土器への埋葬や土器片を被せる埋葬、土器を破碎する儀礼的行為が行われるようになった。そして焼人骨を葬送儀礼外の何らかの儀礼的行為には用いず、埋葬を主体とするような一次火葬が出現したと考えられる。後期新石器時代の火葬形態は、前代の火葬形態からおそらく儀礼を含む社会的背景やパイロテクノロジーの発達等を要因にして徐々に変化した結果、同時代に一次火葬と二次火葬の2形態が認められ、検出場所にもバリエーションがみられるようになったと推測できる。

## 7. おわりに

後期新石器時代の火葬は、その検出場所の違いから一次火葬と二次火葬に分類でき、一次火葬と二次火葬ともに検

出場所にバリエーションがみられることが明らかになった。また、それらの火葬形態がどのように変化してきたのかを先土器新石器時代に遡り考察することで、二次葬と火と儀礼が結びついた結果としての二次火葬が成立したことを指摘した。後期新石器時代における二次火葬の継承と一次火葬の出現は、火葬形態の変化と同時に火葬が内包する埋葬儀礼の変化をも表すものとして捉えられる。本稿では後期新石器時代の火葬を取り巻く埋葬儀礼の全体像については言及できなかったため今後の課題としたい。

謝辞

本稿を執筆するにあたり、ご指導とご教授を賜りました常木見先生をはじめ、ショーン・ドウアティ先生、丹野研一先生、諸先生方に末筆ながら心より感謝申し上げます。また、本文中で用いているテル・エル・ケルク遺跡の資料は、シリア政府と筑波大学の合同発掘調査隊の許可を得て使用したものです。シリア政府・筑波大学合同発掘調査隊のメンバーの方々に改めて感謝申し上げます。

註

- 1) 土器新石器時代は西アジア各地域により年代が異なるため、本稿ではおよそ紀元前7千年紀後半から紀元前5千年紀前半を広く含む後期新石器時代の語句を用いる (e.g. Akkermans and Schwartz 2003; 西アジア考古学講義ノート編集委員会編 2013)。
- 2) テル・エル・ケルク遺跡は、シリア・アラブ共和国の北西部イドリブ県のエル・ルージュ盆地南部に位置する複数の遺丘からなる遺跡である。同遺跡はシリア政府と筑波大学が共同で、1997年から2010年まで発掘調査を行っており、エル・ルージュ1期から2d期までの文化層が検出されている。最も南側の遺丘がテル・エル・ケルク1号丘、その北西に位置する遺丘がテル・エル・ケルク2号丘、最も北側の遺丘がテル・アイン・エル・ケルクである。後期新石器時代の墓地が発見されたのは、テル・アイン・エル・ケルク遺丘である。本稿では、分析対象とするテル・アイン・エル・ケルク遺丘を含めた遺跡群の総称であるテル・エル・ケルクを用いる。
- 3) この用語を用いたアメリカンインディアンの考古学的遺跡で検出された火葬についての論文では、一次火葬場 (primary cremation deposit) や二次火葬場 (secondary cremation deposit)、火葬骨

表3 新石器時代の焼人骨を出土した主な遺跡の年代表

絶対年代 cal. BC	年代	アナトリア	北メソポタミア/ ユーフラテス河中流域	北レヴァント	南レヴァント	イラン高原
9000	先土器新石器時代		ジェルフ・エル・アハマル 			
			ジャアデ・エル・ムガラ 			
8000	先土器新石器時代	アシュックル・ホユック 				
		チャヨヌ 				
7000	後期新石器時代		ボクラス 		テル・アレイ 	
				テル・エル・ケルク   		
6000	後期新石器時代	イエニカブ    メルシン・ユムクテベ 	テル・サビ・アビヤド   ヤリム・テベII  	テル・クルドゥ  		テベ・シアルク  
5000						

 : 故意の建物破壊による被熱    
  : 一次火葬(火葬土坑)    
  : 一次火葬(火葬場)  
 : 二次火葬(土坑)    
  : 二次火葬(土器)    
  : 二次火葬(集積)

の一次的な置き場 (primary deposit of cremated bone) や二次的な置き場 (secondary deposit) とも記述されている。二次的な置き場は二次火葬と同義で、人骨が一次火葬場である野焼き場や火葬場から移動させられた後に置かれた場所と定義している (Cerezo-Roman 2014: 154)。

- 4) エル・ルージュ盆地に点在する遺跡の調査により編まれたエル・ルージュ編年により、エル・ルージュ 1 期は先土器新石器時代 B 期、エル・ルージュ 2a 期とエル・ルージュ 2b 期は土器新石器時代前葉、エル・ルージュ 2c 期は土器新石器時代中葉、エル・ルージュ 2d 期は土器新石器時代後葉にあたる (Tsuneki et al. 1998, 1999, 2000, 2001)。ケルクの新石器時代の墓地は、エル・ルージュ 2c 期の層で検出された。
- 5) テル・エル・ケルク遺跡において 2007 年から 2010 年に発見された人骨の年齢・性別の同定は、ショーン・ドウアティ (Sean P. Dougherty) 氏による。年齢のカテゴリーは以下の通りである。胎児：胎内 9 か月以内、周産期児：胎内 9 か月から胎外 1 ヶ月、乳児：誕生～1 歳、小児：1 歳～12 歳、準成人：12 歳～20 歳、成人 (若年)：20 歳～35 歳、成人 (中年)：35 歳～50 歳、成人 (老年)：50 歳以上 (Dougherty 2011: 28)。

#### 参考文献

- Akkermans, P. A., J. A. K. Boerma, A. T. Clason, S. G. Hill, E. Lohof, C. Meiklejohn, M. le Mière, G. M. F. Molgat, J. J. Roodenberg, W. Waterbolk-van Rooyen and W. van Zeist 1983 Bouqras Revisited: Preliminary Report on a Project in Eastern Syria. *Proceedings of the Prehistoric Society* 49: 335-372.
- Akkermans, P. M. M. G. 2008 Burying the Dead in Late Neolithic Syria. In J. M. Córdoba, M. Molist, M. C. Pérez, I. Rubio and S. Martínez (eds.), *Proceedings of the 5th International Congress on the Archaeology of the Ancient Near East*, Madrid, April 3-8, 2006, 621-645. Madrid, Ediciones Universidad Autónoma de Madrid.
- Akkermans, P. M. M. G. and G. M. Schwartz 2003 *The Archaeology of Syria*. Cambridge, Cambridge University Press.
- Akkermans, P. M. M. G., M. L. Brüning, H. O. Huigens and O. P. Nieuwenhuys 2014 Tell Sabi Abyad 1994-1999 Campaigns: Late Neolithic Stratigraphy and Architecture. In P. M. M. G. Akkermans, M. L. Brüning, H. O. Huigens and O. P. Nieuwenhuys (eds.), *Excavations at Late Neolithic Tell Sabi Abyad, Syria: The 1994-1999 Field Seasons*, 29-86. Turnhout, Brepols.
- Arensburg, B. and I. Hershkovitz 1988 Nahal Hemar Cave. Neolithic Human Remains. *Atiqot English Series* 18: 50-58.
- Arensburg, B. and I. Hershkovitz 1989 Artificial Skull "Treatment" in the PPNB Period: Nahal Hemar. In I. Hershkovitz (ed.), *People and Culture in Change: Proceedings of the Second Symposium on Upper Palaeolithic, Mesolithic and Neolithic Populations of Europe and the Mediterranean Basin*, 115-131. BAR International Series 508. Oxford, Archaeopress.
- Bacvarov, K. 2004 The Birth-Giving Pot Neolithic Jar Burials in Southeast Europe. In V. Nikolov, K. Bacvarov and P. Kalchev (eds.), *Prehistoric Thracian. Proceedings of the International Symposium in Stara Zagora 30.09-04.10. 2003*, 151-160. Sofia-Stara Zagora.
- Bar-Yosef, O. and A. Sillen 1993 Implications of New Accelerator Date of the Charred Skeletons from Kebara Cave (Mt. Carmel). *Paléorient* 19(1): 205-208.
- Bienert, H. D. 1991 Skull Cult in the Prehistoric Near East. *Journal of Prehistoric Religion* 5: 9-23.
- Bindford, L. R. 1963 An Analysis of Cremations from Three Michigan Sites. *Wisconsin Archeologist* 44: 98-110.
- Bostanci, E. Y. 1959 Researches on the Mediterranean Coast of Anatolia: A New Paleolithic Site at Beldibi near Antalya. *Anatolia* 4(9): 129-178.
- Cauvin, J. 1972 Nouvelles fouilles à Tell Mureybet (Syrie). *Annales Archéologiques Arabes Syriennes* 22: 105-115.
- Cerezo-Román, J. I. 2014 Pathways to Personhood: Cremation as a Social Practice Among the Tucson Basin Hohokam. In I. Kuijt, C. Quinn and G. Cooney (eds.), *Transformation by Fire: The Archaeology of Cremation in Cultural Context*, 148-167. Tucson, University of Arizona Press.
- Croucher, K. 2012. *Death and Dying in the Neolithic Near East*. Oxford, Oxford University Press.
- Dougherty, S. 2011 Sickness and Death: Evidence from Human Remains. In A. Tsuneki (ed.), *Life and Death in the Kerkh Neolithic Cemetery*, 27-30. Tsukuba, Department of Archaeology, University of Tsukuba.
- Fowler, K. D. 2004 *Neolithic Mortuary Practices in Greece*. BAR International Series 1314. Oxford, Archaeopress.
- Gallis, K. 1982 *Kafseis Nekron apo tin Neolithiki Epochi sti Thessalia. Ekdoti Tameiou archaeologikon poron kai apallotrioseon*. Athens, Ekdoti Tameiou Archaeologikon Poron kai Apallotrioseon. (in Greek)
- Garstang, J. 1953 *Prehistoric Mersin: Yümük Tepe in Southern Turkey*. Oxford, Clarendon Press.
- Gebel, H. G. K. 1988 Late Epipalaeolithic-Aceramic Neolithic Sites in the Petra Area. In A. N. Garrard and H. G. K. Gebel (eds.), *The Prehistory of Jordan, The State of Research in 1986*, 67-100. BAR International Series 396(1). Oxford, Archaeopress.
- Gerritsen, F. and S. Sholts 2004 Tell Kurdu Excavations 2001. *Anatolica* 30: 37-75.
- Ghirshman, R. 1939 *Fouilles de Sialk: près de Kashan, 1933, 1934, 1937. Volume I*. Paris, Paul Geuthner.
- Gresky, J., J. Haelm and L. Clare 2017 Modified Human Crania from Göbekli Tepe Provide Evidence for a New Form of Neolithic Skull Cult. *Science Advances* 3(6): e1700564.
- Haas, N. 1974 Les restes squelettiques découverts à Tel-Ely (Sheikh Aly). *Mitekufat Haeven: Journal of the Israel Prehistoric Society* 12: 36-46.
- Hershkovitz, I. and E. Galili 1990 8000 Year-Old Human Remains on the Sea Floor Near Atlit, Israel. *Human Evolution* 5/4: 319-358.
- Hironaga, N. 2011 Cremation Burials. In A. Tsuneki (ed.), *Life and Death in the Kerkh Neolithic Cemetery*, 13-17. Tsukuba, Department of Archaeology, University of Tsukuba.
- Jammous, B. and D. Stordeur 1996 Jerf el-Ahmar. In *Syrian-European Archaeology Exhibition: Working Together*, 27-29. Damascus, l'Institut Français d'Études Arabes de Damas.
- Kızıltan, Z. and M. A. Polat 2013 The Neolithic at Yenikapı: Marmaray-Metro Project Rescue Excavations. In M. Özdoğan, N. Başgelen and P. Kuniholm (eds.), *The Neolithic in Turkey: New Excavations and New Research, Northwestern Turkey and Istanbul*, 113-165. Istanbul, Archaeology and Art Publication.
- Koutsadelis, C. 2007 *Mortuary Practices in the Process of Levantine Neolithisation*. BAR International Series 1685. Oxford, John and Erica Hedges.
- Kuijt, I. 1996 Negotiating Equality through Ritual: A Consideration of Late Natufian and Pre-Pottery Neolithic A Period Mortuary Practices. *Journal of Anthropological Archaeology* 15(4): 313-336.
- Kuijt, I. 2000 *Life in Neolithic Farming Communities, Social Organization,*

- Identity, and Differentiation*. New York, Kluwer Academic/Plenum Publishers.
- Kuijt, I., C. P. Quinn and G. Cooney 2014 *Transformation by Fire. The Archaeology of Cremation in Cultural Context*. Tucson, The University of Arizona Press.
- Le Mort, F., A. Erim-Özdoğan, M. Özbek and Y. Yılmaz 2000 Feu et archéologie au Proche-Orient (Épipaléolithique et Néolithique). Le lien avec les pratiques funéraires. Données nouvelles de Çayönü (Turquie). *Paléorient* 26(2): 37-50.
- Lichter, C. 2016 Burial Customs of the Neolithic in Anatolia: An Overview. In Ü. Yalçın (ed.), *Anatolian Metal VII*, 71-83. Bochum, Deutsches Bergbau-Museum.
- Lichter, C. 2017 The Transition from the Mesolithic to the Neolithic between Western Anatolia and the Lower Danube: Evidence from Burial Customs. In A. Reingruber, Z. Tsirtsoni and P. Nedelcheva (eds.), *Going West? The Dissemination of Neolithic Innovations between the Bosphorus and the Carpathians*, 113-122. London and New York, Routledge.
- Mallowan, M. E. L. 1936 The Excavations at Tell Chagar Bazar, and an Archaeological Survey of the Habur Region, 1934-5. *Iraq* 3(1): 1-59.
- Merpert, N. Y. and R. M. Munchaev 1993 Burial Practices of the Halaf Culture. In N. Yoffee and J. J. Clark (eds.), *Early Stages in the Evolution of Mesopotamian Civilization: Soviet Excavations in Northern Iraq, 207-224*. Tucson, University of Arizona Press.
- Merpert, N. Y., R. M. Munchaev and N. O. Bader 1976 The Investigations of Soviet Expedition in Iraq 1973. *Sumer* 32: 25-62.
- Merpert, N. Y., R. M. Munchaev and N. O. Bader 1977 The Investigations of Soviet Expedition in Iraq 1974. *Sumer* 33(1): 65-104.
- Merpert, N. Y., R. M. Munchaev and N. O. Bader 1978 Soviet Investigation of the Sinjar Plain. *Sumer* 34: 27-71.
- Merrett, D. C. and C. Meiklejohn 2007 Is House 12 at Bouqras a Charnel House? In M. Faerman, L. Kolska Horwitz, T. Kahana and U. Zilberman (eds.), *Faces from the Past. Skeletal Biology of Human Populations from the Eastern Mediterranean*. BAR International Series 1603. 127-139. Oxford, Archaeopress.
- Moore, A. M. T., G. C. Hillman and A. J. Legge 2000 *Village on the Euphrates. From Foraging to Farming at Abu Hureyra*. New York, Oxford University Press.
- Oestigaard, T. 1999 Cremations as Transformations: When the Duel Cultural Hypothesis was Cremated and Carried away in Urns. *European Journal of Archaeology* 2: 345-364.
- Özbal, R. D. 2006 *Households, Daily Practice, and Cultural Appropriation at Sixth Millennium Tell Kurdu*. Ph.D. dissertation. Northwestern University.
- Özbal, R., F. Gerritsen, B. Diebold, E. Healey, N. Aydin, M. Loyet, F. Nardulli, D. Reese, H. Ekstrom, S. Sholts, N. Mekel-Bobrov and B. Lahn 2004 Tell Kurdu Excavations 2001. *Anatolica* 30: 37-107.
- Özbek, M. 1976 Étude anthropologique d'ossements humains néolithiques du VIIIe millénaire B.C. provenant de Mureybet, Syrie. *Annales Archéologiques Arabes Syriennes* 26: 161-180.
- Özbek, M. 1998 Human Skeletal Remains from Aşikli: A Neolithic Village near Aksaray, Turkey. In G. Arsebük, M. J. Mellink and W. Schirmer (eds.), *Light on Top of the Black Hill: Studies Presented to Halet Çambel*, 567-79. Istanbul, Ege Yayınları.
- Özdoğan, A. 1999 Çayönü. In M. Özdoğan and N. Başgelen (eds.), *Neolithic in Turkey. The Cradle of Civilization*, 35-63. Istanbul, Arkeoloji ve Sanat Yayınları.
- Özdoğan, M. 2013 Neolithic Sites in the Marmara Region Fikirtepe, Pendik, Yarımburgaz, Toptepe, Hoca Çeşme, and Asağı Pınar. In M. Özdoğan, N. Başgelen and P. Kuniholm (eds.), *The Neolithic in Turkey. New Excavations and New Research. Vol.5: Northwestern Turkey and Istanbul*, 167-269. Istanbul, Archaeology and Art Publications.
- Parker Pearson, M. 1999 *The Archaeology of Death and Burial*. College Station, Texas A & M University Press.
- Quinn, C. P., L. Goldstein, G. Cooney and I. Kuijt 2014 Perspectives: Complexities of Terminologies and Intellectual Frameworks in Cremation Studies. In I. Kuijt, C. Quinn and G. Cooney (eds.), *Transformation by Fire: The Archaeology of Cremation in Cultural Context*, 25-32. Tucson, University of Arizona Press.
- Rohrer-Ertl, O., K.-W. Frey and H. Newesly 1988 Preliminary Note on Early Neolithic Human Remains from Basta and Sabra. In A. N. Garrard and H. G. K. Gebel (eds.), *The Prehistory of Jordan, the State of Research in 1986*, 135-136. BAR International Series 396. Oxford, Archaeopress.
- Sołtysiak, A. and H. Fazeli Nashli 2016 Evidence of Late Neolithic Cremation at Tepe Sialk, Iran. *Iranica Antiqua* 51: 1-19.
- Stordeur, D. and F. Abbès 2002 Du PPNa au PPNB: mise en lumière d'une phase de transition à Jerf el Ahmar (Syrie). *Bulletin de la Société Préhistorique Française* 99(3): 563-595.
- Stordeur, D., D. Helmer and G. Willcox 1997 Jerf el Ahmar: un nouveau site de l'horizon PPNa sur le Moyen Euphrate syrien. *Bulletin de la Société Préhistorique Française* 94(2): 282-285.
- Şenyürek, M. S. 1954 A Note on the Skulls of Chalcolithic Age from Yümüktepe. *Belleten XVIII, Sayı* 69: 1-25.
- Thompson, T. 2015 Fire and Body: Fire and People. In T. Thompson (ed.), *The Archaeology of Cremation: Burned Human Remains in Funerary Studies*, 1-17. Oxford, Oxbow Books.
- Thurman, M. D. and L. J. Willmore 1981 A Replicative Cremation Experiment. *North American Archaeologist* 2: 275-283.
- Tsuneki, A. 2011 Tell el-Kerkh, The Discovery of the Kerkh Neolithic Cemetery. In A. Tsuneki (ed.), *Life and Death in the Kerkh Neolithic Cemetery*, 2-5. Tsukuba, Department of Archaeology, University of Tsukuba.
- Tsuneki, A., J. Hydar, Y. Miyake, S. Akahane, T. Nakamura, M. Arimura and S. Sekine 1998 First Preliminary Report of the Excavations at Tell el-Kerkh (1997), Northwestern Syria. *Bulletin of the Ancient Orient Museum* 18: 1-40.
- Tsuneki, A., J. Hydar, Y. Miyake, S. Akahane, M. Arimura, S. Nishiyama, H. Sha'baan, T. Anezaki and S. Yano 1999 Second Preliminary Report of the Excavations at Tell el-Kerkh (1998), Northwestern Syria. *Bulletin of the Ancient Orient Museum* 19: 1-40.
- Tsuneki, A., J. Hydar, Y. Miyake, M. Hudson, M. Arimura, O. Maeda, T. Odaka and S. Yano 2000 Third Preliminary Report of the Excavations at Tell el-Kerkh (1999), Northwestern Syria. *Bulletin of the Ancient Orient Museum* 20: 1-32.
- Tsuneki, A., J. Hydar, Y. Miyake, M. Maeda, T. Odaka, K. Tanno and A. Hasegawa 2001 Fourth Preliminary Report of the Excavations at Tell el-Kerkh (2000), Northwestern Syria. *Bulletin of the Ancient Orient Museum* 21: 1-36.
- Turville-Petre, F. 1932 Excavations in the Mugharet El-Kebarah. *The Journal of the Royal Anthropological Institute of Great Britain and Ireland* 62: 271-276.
- Verhoeven, M. 2000 Death, Fire and Abandonment. Ritual Practice at Late Neolithic Tell Sabi Abyad, Syria. *Archaeological Dialogues* 7: 46-65.
- Webb, S. G. and Edwards, P. C. 2002 The Natufian Human Skeletal Remains

- from Wadi Hammeh 27 (Jordan). *Paléorient* 28(1): 103-124.
- Wells, C. 1960 A Study of Cremation. *Antiquity* 34: 29-37.
- Yener, K. A. 1999 Oriental Institute Returns to the Amuq: 1998 Excavation Season at Tell Kurdu, Turkey. *The Oriental Institute News and Notes* 161: 1-3.
- Yener, K. A., C. Edens, T. P. Harrison, J. Verstraete and T. J. Wilkinson 2000 The Amuq Valley Regional Project, 1995-1998. *American Journal of Archeology* 104: 163-220.
- 常木 晃 1998 「新石器時代の巨大集落遺跡—テル・エル・ケルク 1997 年度調査—」『第 5 回西アジア発掘調査報告会報告集』8-14 頁。
- 常木 晃 2002 「新石器時代の巨大集落遺跡—テル・エル・ケルク 2001 年度調査—」『第 9 回西アジア発掘調査報告会報告集』12-13 頁。
- 常木 晃 2003 「新石器時代の巨大集落遺跡—テル・エル・ケルク 2002 年度調査—」『第 10 回西アジア発掘調査報告会報告集』31-36 頁。
- 常木 晃 2008 「新石器時代の巨大集落遺跡—テル・エル・ケルク 2007 年度調査—」『第 15 回西アジア発掘調査報告会報告集』39-46 頁。
- 常木 晃 2011 「新石器時代の巨大集落遺跡—テル・エル・ケルク 2010 年度調査—」『第 18 回西アジア発掘調査報告会報告集』30-34 頁。
- 常木 晃・小高敬寛・長谷川敦章・村上尚子 2009 「新石器時代の巨大集落遺跡—テル・エル・ケルク 2008 年度調査—」『第 16 回西アジア発掘調査報告会報告集』34-39 頁。
- 常木 晃・長谷川敦章 2010 「新石器時代の巨大集落遺跡—テル・エル・ケルク 2009 年度調査—」『第 17 回西アジア発掘調査報告会報告集』31-36 頁。
- 西アジア考古学講義ノート編集委員会（編）2013 『西アジア考古学講義ノート』日本西アジア考古学会。

廣永 尚子  
筑波大学人文社会系  
Naoko HIRONAGA  
Faculty of Humanities and Social Sciences,  
University of Tsukuba

